

平成30年6月19日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04548

研究課題名(和文) 知的障害のない自閉症児の教育課程モデルの開発

研究課題名(英文) Design of curriculum model for the child with high functioning autism

研究代表者

渡部 匡隆 (Watanabe, Masataka)

横浜国立大学・教育学研究科・教授

研究者番号：30241764

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：自閉症・情緒障害特別支援学級において自閉症のある児童生徒に対する教育課程を編成していくために3つの研究を行った。第1に、知的障害のない自閉症児の学習上のニーズと学習上の特徴、及び障害特性について明らかにした。第2に、自閉症・情緒障害特別支援学級における指導内容・方法・評価方法及び年間指導計画を含めた教育課程モデル(試案)を作成した。第3に、知的障害のない自閉症児に対する学習支援のための指導方法や必要な配慮について明らかにした。それらの結果から、自閉症・情緒障害特別支援学級の教育課程モデル(試案)を作成するとともに、作成のための基礎的資料を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：In the present study, we studied three to organize the curriculum for the child with high functioning autism in an autism and emotional disturbance special support class. First, we cleared the educational needs and autistic traits for the child with high functioning autism. Second, we made the teaching contents, method, and evaluation method in the autism and emotional disturbance special support class and a curriculum model (tentative plan). Third, we determined it about the teaching method for learning support for the child with high functioning autism. Those results, we made the curriculum model (tentative plan) of the autism and emotional disturbance special support class and were able to obtain basic data for making.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉症 特別支援学級 教育課程 指導体制

1. 研究開始当初の背景

平成13年1月に文部科学省から「21世紀の特殊教育の在り方」が報告された。そして、「今後、高機能自閉症児への教育と心因性の情緒障害児への教育の違いを考慮しつつ、両者に対する教育的対応の在り方を見直していく必要がある」と提言された(なお、本報告書では、高機能自閉症のことを知的障害のない自閉症とする)。

それらを受けて、今日までいくつかの取組が進められてきた。その一つが、平成20年2月の文部科学省通知である。本通知によって、特別支援学級の対象として自閉症者が認められ、学級名称も情緒障害学級から自閉症・情緒障害特別支援学級に変更された。このことにより、自閉症者のみでも特別支援学級を開設することができ、自閉症、すなわち知的障害のない自閉症児に対しても特別支援学級において特別な教育課程を編成することによって専門的な教育を実施することができるようになった。

ところが、これまでの自閉症者に対する教育的対応は、情緒障害教育の中で行われてきた。情緒障害は、主として対人関係の軋轢などの心因性によるものとされる。一方で、自閉症は中枢神経系の機能不全による発達障害とされている。このように自閉症児と情緒障害児は、原因や指導内容や方法が異なるにもかかわらず両方とも情緒障害教育の対象となっていたことから、それぞれの特性に応じた指導が適切に行われてこなかった面がある。そのため、知的障害のない自閉症児への教育的対応を適切に進めていくためには、解決していかなければならない最も大きな課題の一つとして、自閉症・情緒障害特別支援学級における教育課程、及び指導方法の開発があった。

このことに関して、国は平成21~22年度に全国11県の小学校、中学校、特別支援学校を研究協力校として、「自閉症の特性に応じた教育課程の編成、指導内容・方法等の開発研究」を試みた。ところが、それらの総括は行われておらず、自閉症の特性に応じた教育課程の編成、指導内容・方法等に関する国としての基本的な方針は示されていない。

一方、国立特別支援教育総合研究所では、平成22年~25年度にかけて「自閉症・情緒障害特別支援学級における自閉症のある児童生徒の国語科及び算数・数学科の指導の実際」として、国語科及び算数・数学科の指導内容の編成及び指導方法に関する研究を行ってきた。研究では、自閉症・情緒障害特別支援学級における教育課程を編成するために基礎となる国語科及び算数・数学科のアセスメントシートの開発を進めてきた。その結果、開発されたアセスメントシートをもとに知的障害のない自閉症児の国語科、算数・数学科の実態の一端を明らかにすることができた。しかしながら、対象とされた事例数が限られていたことから、対象者数を増やして

国語科、算数・数学科等の各教科の学習上の特徴を明らかにしていく必要があるとされた。また、自立活動の指導を展開していくためには、知的障害のない自閉症の社会性を中心とした障害特性の実態やその実態を明らかにする方法に明らかにしていく必要がある。

先の研究では、自閉症・情緒障害特別支援学級の教育課程を編成するために、国語科、算数・数学科を例に教育内容を精選するための考え方や方略が示された。それらは、自閉症・情緒障害特別支援学級において教育課程を編成していくための貴重な手がかりとなると考えられるが、実際に教育課程を編成するためには国語科や算数・数学科等の各教科に加えて、自立活動、交流及び共同学習を含めて編成する必要であり、それらを含めた自閉症・情緒障害特別支援学級の教育課程モデル(試案)を示していく必要がある。

さらに、知的障害のない自閉症児に教科等の指導を効果的に行うための工夫や配慮についても明らかにしていく必要がある。これまで、知的障害のある自閉症児を中心に、コミュニケーションや生活に必要な力を獲得したり、社会の中で身につけた力を般化したりしていくための指導方法や工夫・配慮について検討されてきた。ところが、知的発達に標準的な範囲にあっても想像性や社会性に障害をもつ知的障害のない自閉症児が教科的な力を適切に学習していくための指導方法や工夫・配慮については十分に検討されてきていない。知的障害のない自閉症児を対象に学習指導を行う場合、標準的な知的発達を考慮して教科書を中心として学習支援が中心となる。しかし、相手の心情や意図を理解したり、状況や文脈を適切に捉えたり、客観的に、あるいは多面的に物事を理解したりすることに困難をもつ自閉症児に対して、教科書の内容を適切に理解するための指導方法や工夫・配慮を明らかにする必要がある。

以上から、本研究では、大きく3つの方向からアプローチする。第1に、知的障害のない自閉症児の学習上のニーズや実態、また特性を明らかにするとともに、それらを見出すためのツールを開発する、第2に自閉症・情緒障害特別支援学級における教育課程のモデル(試案)を作成する。第3に、知的障害のない自閉症児に対する国語、算数の教科的な学習を効果的に進めていくための指導方法や必要な工夫、配慮について明らかにする。それらをもとに、自閉症・情緒障害特別支援学級において自閉症のある児童生徒に対する教育課程を編成していくための基礎資料を得ることねらいとする

2. 研究の目的

自閉症・情緒障害特別支援学級において自閉症のある児童生徒に対する教育課程を編成していくための基礎資料を得ることねらいとする。具体的には、第1に、知的障害の

ない自閉症児の学習上のニーズ、及び障害や学習上の特徴を明らかにする。第2に、自閉症・情緒障害特別支援学級における指導内容・方法・評価方法及び年間指導計画を含めた教育課程モデル(試案)を作成する。第3に、知的障害のない自閉症児に対する学習支援のための指導方法や必要な工夫、配慮について明らかにする。

3. 研究の方法

1) 実態把握と特性把握に関する研究

知的障害のない自閉症児の学習上のニーズと、学習を効果的に進めていくために社会性を中心とした自閉症の障害特性を明らかにすることをねらいに、学校教育を終了した自閉症者の保護者及び支援機関職員への聞き取り調査を行った。

また、自閉症の障害特性を解明するために、中枢性統合に関する実験研究、さらに、知的障害のない自閉症児の社会性の実態を解明するための対人関係チェックリストの作成と、それらを用いた実態の把握を行った。

2) 教育課程モデルの試案作成に関する研究

自閉症・情緒障害特別支援学級における指導内容・方法・評価方法及び年間指導計画を含めた教育課程モデル(試案)を作成するために、自閉症・情緒障害特別支援学級において知的障害のない自閉症児を対象に教育活動を行っている2校の公立中学校を対象に実地研究を行った。2校の中学校に3カ年にわたって定期的に訪問し、教育活動を参観するとともに担任と継続的な協議を行い、教育課程モデル(試案)の開発を行った。

3) 学習指導上の工夫や配慮に関する研究

知的障害のない自閉症児に学習支援を行う上で、特性に配慮しながら効果的に指導を進めていくための指導上の工夫、配慮を明らかにするために、幼稚園の年長児を1名、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する小学2年生を2名、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する中学1年生の生徒1名を対象に、国語科、算数・数学科の内容を中心に臨床研究を行った。

4. 研究成果

1) 実態把握と特性把握に関する研究

(1) 知的障害のない自閉症者の実態と学習上のニーズ把握に関する研究

学校教育を終了した青年期段階にある自閉症を含めた発達障害者に社会参加の実態と適応の困難さについて、支援施設職員と保護者を対象に半構造化面接による聞き取り調査を行った。その結果、発達障害者支援センターの職員、保護者とも家庭や職場での適応に加えて、学校生活の困難性を指摘した。中でも、人間関係の形成やコミュニケーションについて課題が挙げられた。必要な支援については、本人に対する環境的支援及び直接的な支援とともに、関連機関との連携、普及啓発が指摘された。保護者は、本人に対する

環境的支援、関連機関との連携、広報・福祉システムの充実を挙げた。それらの結果から、知的障害のない自閉症を含めた発達障害児の学校生活への支援ニーズと、本人に対する直接的な支援、及び環境的支援の方法の開発と普及の必要性が示唆された。

(2) 特性把握に関する研究

自閉症の中核的な特性の一つとされる中枢性統合の特性と支援方法の解明を目的に、2つの研究を行った。研究1では、標準的な知的発達のある中学生の自閉症児10名と通常の学級に在籍する小学2年生の定型児10名を対象に知覚体制化課題、絵カード並び替え課題、スピーチ課題を行った。その結果、個々の自閉症児に異なる知覚傾向が存在すること、知覚様式は独立したものではなくつながりあるものと理解する必要性が示唆された。

研究2では、通常の学級に在籍する標準的な知的発達のある小学5年生の自閉症児1名を対象に、絵カードによる物語の類推と自分の考えをまとめて相手に伝えるスピーチ課題を支援する方法について検討した。その結果、絵カードのつながりを明確に示すために動画にして提示することで、物語の配列と説明の正反応率が増加した。また、スピーチ課題では、テーマから想起された出来事を視覚的に提示することで全体をまとまりあるものとして捉えたり、ある出来事を分割化することで全体と部分をつながりのあるものとして捉えたりすることができた。

標準的な知的発達のある自閉症児の対人関係と幼稚園での適応の実態を明らかにするとともに、他者への自発性なかわりが見られにくい自閉症児に対する対人的な相互作用を促す支援方法を明らかにすることを目的に2つの研究を行った。

研究1において、幼稚園に在園する自閉症児を対象に、自閉症状チェックリストを作成し、遊び方やかわり方の実態について評定した。それらの結果を、定型発達の幼児と比較することで、対人関係の実態を検討した。合わせて、幼稚園適応チェックリストを作成し、幼稚園での適応の実態を評定した。

その結果、自閉症児は知的発達が標準的であっても他児に働きかけるなどの対人的な関係が定型発達児よりも明らかに低いことが確認された。行動観察からは、話しかければ応答はできるものの、他児や教員に自発的に働きかけることが弱く、受け身的な人間関係の持ち方が明らかになった。

研究2では、知的発達に遅れのない自閉症児に対して、自発的な対人行動の支援方法を検討した。その結果、自閉症児の好みや、微弱な自発的行動を積極的に強化することによって他者への接近行動や働きかけが増加するとともに、家庭でもそれらの支援を行うことで両親との会話が増加することが示された。

2) 教育課程モデルの試案作成に関する研究

教育課程編成の手順として、教育課程編成に対する学校の基本方針を明確する、教育課程編成のための事前の研究や調査をもとに児童生徒の実態や学校を取り巻く諸条件を明らかにする、特別支援学級の教育目標を設定する、重点を置く指導内容を明確にする、指導内容を組織し、各教科、道徳、外国語活動（小学校のみ）、総合的な学習の時間、特別活動及び自立活動について、各教科等間の指導内容の関連を図りつつ、系統的な指導ができるように指導内容を配列するとともに、児童生徒の実態に応じて発展的な内容にも取り組めるようにする、授業時数の配当を行い、年間の授業時数、週の授業時数、時間割の設定を行う中で編成する。

以上の手順を踏まえて、3年間の共同研究を通して、自閉症・情緒障害特別支援学級の教育課程編成モデルを作成するための手順と教育課程試案を明らかにした。

まず、児童生徒の実態を明らかにするために国語科学習評価シート、及び算数・数学科学習評価シートを活用することで、自閉症児の国語、算数・数学科の学習到達度、自閉症の特性から獲得が難しい学習内容、自閉症の特性から獲得が容易な学習内容を見出すことができ、自閉症の特性を踏まえた教科指導に係る実態把握ができることを確認した。

次に、教科学習の指導内容設定シートを活用することで、自閉症の特性に応じた学習課題の把握、指導の重点の置き方、指導の順序、指導方法等を適切に判断できることが示された。教科学習の指導内容設定シートの具体的な手順は以下の通りである。ステップ1：学習の空白期間や未習得の内容について把握する、ステップ2：自閉症の特性による学びにくさやつまずき、誤学習等の状況を把握する、ステップ3：当該学年の内容で達成できていない内容について、どこの段階からつまずいているか把握する、ステップ4：学習到達度や自閉症の特性による得意な学習、苦手な学習等を総合的に把握する、ステップ5：学習内容の重点箇所、精選箇所、学習の優先順位等を検討する、ステップ6：年間指導計画や個別指導計画に反映させる。それらのステップに基づいて段階的に取り組むことで各教科の指導内容を明らかにすることができるが示された。

続いて、自立活動を指導するための実態把握として社会性・行動チェックリストの有効性が示された。それらのチェックリストを活用することで、対人関係、順番やルールを理解、情緒のコントロールの課題を視覚的に把握することができ、自立活動において児童生徒に重点的に指導すべき項目を把握することができた。

さらに、自立活動の指導内容設定シートを適用することで、自立活動の指導内容や実際の指導に必要な時間数を検討できることが示された。自立活動の指導内容設定シートの具体的な手順は以下の通りである。ステップ

1：社会性・行動チェックリストの観察項目に沿って5段階で自閉症の特性による困難さを把握する、ステップ2：児童生徒の個々の課題を把握するとともに、学級の児童生徒に共通する課題を把握する、ステップ3：学級の児童生徒に共通する課題をもとに、自立活動の指導内容や実際の指導に必要な時間数を検討する、ステップ4：教育課程の編成に向けて指導項目、内容及び各教科等との関連や指導時間を検討する、ステップ5：個別指導計画や自立活動の年間指導計画に反映する。それらのステップに基づいて段階的に取り組むことで自立活動の指導内容を明らかにすることができるが示された。

最後に、交流及び共同学習のための児童生徒の実態把握を行う。その際、交流及び共同学習の学習態勢チェックリストを活用したり、通常の学級の担任、教科担任等と協議したりしながら児童生徒が集団の中で生じる困難さや児童生徒に必要な力を把握することで、交流及び共同学習で取り組む内容や時間数を明らかにできることが示された。

それらをもとに、自立活動の授業時数の設定、各教科等の授業時数の設定、交流および共同学習の時間数を設定することで教育課程を編成できることが示唆された。自閉症・情緒障害特別支援学校の教育課程モデルの試案を時間割例として示した。

3) 学習指導の工夫や配慮に関する研究

(1) 物語文理解を通じた国語科の学習指導の配慮に関する研究

標準的な知的発達のある2名の自閉症児を対象に、物語文を題材に国語科の学習指導を効果的に展開するための配慮について検討した。指導上の配慮として、物語に登場する事物の絵カードを用意し、それらをマジックテープで覆われた台紙に添付していくことで物語の再構成（起承転結）を促すようにした。それらの配慮を行うことで、場面を見立てる、絵カードを人形劇のように動かす、場面を区切って場面を考えるとといった行動が表出した。それらの効果を、事前・事後テストで評価した結果、物語文を参照する行動の増加と、物語文の正答率が向上した。

(2) 筆算課題を通じた算数科の学習指導の配慮に関する研究

小学2学年の知的障害のない自閉症児を対象に、筆算課題を通じた算数科の学習指導を効果的に展開するための配慮について検討した。具体的な指導上の配慮として、問題を解く前に一の位から先に計算することを「約束カード」として示しながら、計算の手順を確認するようにした。また、一の位を赤枠で囲み、十の位か一の位のどちらから先に計算すればよいか視覚的に確認できるようにする、問題を1問ずつ提示するなどの工夫を行った。その結果、一の位から計算するようになり、問題を解いている途中で他の問題にも取りかかることがなくなり、正しく筆算で計算することができるようになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

渡部 匡隆、発達障害者の社会参加における応用行動分析的アプローチ - 成人期の自立のために -、LD 研究、査読なし、Vol.26、2017、pp.64-71

朝岡 寛史、熊谷 正美、岡村 章司、渡部 匡隆、自閉症スペクトラム児の自発的な空間的視点取得に関する研究 - 再認プロンプト手続きの指導効果の検討 -、自閉症スペクトラム研究、査読有、Vol.14、No. 1、2016、pp.5-11

朝岡 寛史、岡村 章司、渡部 匡隆、自閉症児における授与動詞構文の指導 - 自己動作を用いた指導方法の効果の検討 -、自閉症スペクトラム研究、査読有、No.12、Vol.2、2015、pp.5-12

[学会発表](計10件)

渡部 匡隆 他、特別支援教育推進のための学校と専門家の効果的な連携 - 専門家配置から5年間の活用実践の結果報告と検証 -、日本特殊教育学会、2017

渡部 匡隆 他、自閉スペクトラム症児における授与動詞の理解に関する検討 受け渡し場面の眼球運動の分析 -、日本特殊教育学会、2017

渡部 匡隆 他、ふたごの自閉症児をもつ母親の養育行動を高める支援 - トイレット・トレーニングの行動コンサルテーションを通して -、日本特殊教育学会、2017

渡部 匡隆 他、組織全体で取り組む学校研究・校内研修、日本LD学会、2017

渡部 匡隆 他、自閉症スペクトラム児のコミュニケーション支援 集団学習において仲間と関わり合い、ともに育つために -、日本特殊教育学会、2016

渡部 匡隆 他、自閉症スペクトラムのある児童生徒の教育課程の開発 - 知的障害のある自閉症スペクトラム児を中心に -、日本特殊教育学会、2015

渡部 匡隆 他、知的障害のない自閉症スペクトラム児の追跡調査(1) - 対象児の学校卒業後の社会適応の実態について -、日本特殊教育学会、2015

渡部 匡隆 他、知的障害のない自閉症スペクトラム児の追跡調査(2) - 保護者の心理的变化に及ぼす影響 -、日本特殊教育学会、2015

渡部 匡隆 他、自閉傾向のある幼児の授与動詞の獲得に関する研究 - 視点の移動に着目した指導方法の検討 -、日本発達障害学会、2015

渡部 匡隆 他、氷山モデルに基づく ASD のある人の問題解決アプローチ - TEACCH アプローチの応用 -、日本自閉症スペクトラム学会、2015

[図書](計8件)

渡部 匡隆 他、金剛出版、特別支援教育の到達点と可能性 - 2001~2016年: 学術研究からの論考 -、2017、299

渡部 匡隆 他、教育と医学、家庭における発達障害の理解と支援、2017、88

渡部 匡隆 他、東京都教育委員会、自閉症・情緒障害特別支援学級の教育課程の在り方について、2017、31

渡部 匡隆 他、福村出版、医学診断/福祉サービス/特別支援教育/就労支援、2016、200

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡部 匡隆 (WATANABE, Masataka)

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号: 30241764

(2)研究協力者

石坂 務 (ISHIZAKA Tsutomu)

横浜市立本郷特別支援学校・主幹教諭

朝岡 寛史 (ASAOKA, Hiroshi)

筑波大学障害科学系・助教

岡村 章司 (OKAMURA, SHOJI)

兵庫教育大学大学院・教授

関口 友梨 (SEKIGUCHI, Yuri)

横浜国立大学・大学院教育学研究科

峰 淑美 (MINE, Toshimi)

横浜国立大学・大学院教育学研究科

新井 理央 (ARAI, Rio)

横浜国立大学・大学院教育学研究科

坂 直哉 (BAN, Naoya)

横浜国立大学・大学院教育学研究科

藤江 涼 (Fujie, Ryo)

横浜国立大学・教育学部